

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。



(安藤昭子『問いの編集力 思考の「はじめり」を探究する』より)

(注) ○□は段落符号である。

○啓蟄Ⅱ春が来る直前の、冬ごもりしていた生物たちが目覚める三月の下旬から中旬ころの時期。

○高浜虚子Ⅱ明治から昭和にかけて活動した俳人。

○攪拌Ⅱ液体などをかき混ぜること。

○ニューロンⅡ生物の脳を構成する神経細胞。

○セロトニンⅡ脳内に分泌される神経伝達物質。

(1) 第三段落の「Ⅹ」から「Ⅱ」までにあてはまることは

として最も適当なものを次のアからカまでのの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- |   |            |   |           |
|---|------------|---|-----------|
| ア | 内側の豊かな世界   | イ | 外側の華々しい世界 |
| ウ | 単線的で合理的な思考 | エ | 複眼的で複雑な記憶 |
| オ | 考える土壌      | カ | 恵みの雨      |

(2) 合理性のもとでは捨てられてしまいかねない雑多な思考のかけ

らを伸び伸びとさせてやるのが、想像力の土壌には大事なのだとあるが、その理由を六十字以上七十字以内で説明しなさい。ただし、「支え」「問う力」という二つのことばを全て使って、「自覚できないほどの……」という書き出しで書き、「……から。」で結ぶこと。二つのことばはどのような順序で使ってもよい。

(注) ・句読点も一字に数えて、一字分のマスを使うこと。

・文は、一文でも、二文以上でもよい。

・次の枠を、下書きに使ってもよい。ただし、解答は必ず解答用紙に書くこと。

							自
							覚
							で
							き
							な
							い
							ほ
							ど
							の

70

60

(3) この文章の論の進め方の特徴として適当なものを次のアから力までの中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア 冒頭で子どもの頃の思い出を述べ、以降も自然の情景描写を中心に展開している。

イ 自然や科学的事例と人間の思考や感情を比較し、共通する構造や特徴を導いている。

ウ 論を進める際、比喻や描写を避け、事実や数値のみで説明を組み立てている。

エ 身近で見落としがちな現象を例に示し、そこから抽象的で普遍的な考察へ発展させている。

オ 抽象的な理論を最初に提示し、最後に具体的な事例を補足して理解を深めている。

カ 読者への問いかけや行動の提案を避け、解説や説明だけで文章を完成させている。

(4) 次の文章は、第五段落(5)以降に述べられている筆者の考えをある生徒がまとめたものである。この生徒の文章に対する評価として適当でないものをあとのアから力までの中から二つを選び、記号で答えなさい。

想像力を豊かに保つためには、「私」という硬い枠組みをゆるめ、役に立たないように見える好奇心や違和感、断片的な記憶を自由に動かすことが大切である。社会の中で役割を果たすうちに、一貫した自己像に縛られて内面の複雑さや意外性は見えにくくなるが、柔らかく開かれた状態を保つことで感覚は活性化する。人の体は数多くの細胞や情報の層から成り立ち、それが複雑に結びつきながらも一つの「私」としてまとまっている。この多層的な存在には、必然的に矛盾やズレが生じる。

矛盾やギャップは変化や新たな問いを生み出す力となる。物語が意外性で人を惹きつけるように、不安定さや不甲斐なさも含めた自分自身に価値を見いだすことが重要である。整合性だけを求めず、「たくさんの私」を解き放つことで、何にでもなれる柔らかな自分を取り戻せる。子どもの頃のような多様な自己は今も内に息づき、それが表に現れるとき、想像力に新たな芽が育つ。

ア 想像力を育てる方法と、その背景を分けて説明している。

イ 体の構造と自己の多様性を関連づけて述べている。

ウ 子どもの頃の経験と現在の想像力を対比させている。

エ 社会で役割を通じて想像力が強まる過程を説明している。

オ ギャップや矛盾が問いを生む力になると指摘している。

カ 一貫した自己像を維持する重要性を強調している。

(5) 「B」「C」にあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア B まず C そして

イ B したがって C さらに

ウ B つまり C なお

エ B はじめに C もしくは

(6) 次の①から④までの説明は、本文の各段落の役割を表したものである。本文の流れに合うように正しい順序に並べたものとして最も適当なものをあとのアからエまでの中から選び、記号で答えなさい。

① 人間の「私」が多層的で矛盾を含む存在であるということを示し、その複雑さから新たな問いや活力が生まれることを論じている。

② 土壌や微生物の働きを取り上げ、文明論の観点から危険を指摘したのち、人間の想像力の比喩として説明している。

③ 矛盾や落差、意外性が人を動かす力となり、問いや変化を生み出す原動力となって、人間を前進させることを論じている。

④ 子どもの頃の自由で多様な「私」の感覚を取り上げ、何にてもなれる柔らかな自己の可能性を思い出させ、未来への示唆を与えている。

ア ② ↓ ① ↓ ④ ↓ ③

ウ ① ↓ ② ↓ ③ ↓ ④

イ ② ↓ ① ↓ ③ ↓ ④

エ ① ↓ ② ↓ ④ ↓ ③

二 次の問いに答えなさい。

(1) 次の文中の キュウ ① と キュウ ② に用いる漢字として正しいものをそれぞれあとのアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

患者をキュウ① キュウ② 搬送する。

ア 急      イ 給      ウ 休      エ 救

(2) 次の文中の 確か と同じ意味で用いられていない漢字をあとのアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

彼の料理人としての腕は確かだ。

ア 確執      イ 確証      ウ 確実      エ 確立

(3) 次の文中の (      ) にあてはまる最も適当なことばをあとのアからエまでの中から選び、記号で答えなさい。

彼は突然のアクシデントでも (      ) としていた。

ア 準備万端      イ 悠々自適      ウ 意気投合  
エ 玉石混交      オ 泰然自若

三 次  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。



---



(あさのあつこ『透き通った風が吹いて』より)

(注)

○1 5は段落符号である。

○古町||岡山県美作市の地名。

○葉茶屋||茶葉の販売や抹茶の提供を行う店。

○詮無い||行っても仕方がない。無駄である。

○お大尽||お金持ち。裕福な人。

○美作||岡山県の北東部に位置する美作市。

○奈義牛||岡山県奈義町のブランド牛。

○嗤って||あざけり、見下すように笑う。

○嘲弄||あざけり、からかうこと。

○矜持||誇り。プライド。

(1) 次の一文が本文から抜いてある。この一文が入る最も適当な箇所をあとのアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

【一文】

「おまえの考え次第じゃ。人生なんてどうなるかわからんし。無理やり家業を押し付ける時代じゃないけん。選択肢はようけある方がええもんな」

ア 本文中の〔①〕      イ 本文中の〔②〕

ウ 本文中の〔③〕      エ 本文中の〔④〕

(2) 家業を継いだ溪哉の兄・淳也に関する説明として最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 都会での暮らしを懐かしみ、父の急死をきっかけに義務感だけで田舎に戻り、家業を続けることに迷いや不満を抱いている。

イ 故郷の衰退を当然とは見なさず、時代に沿った可能性を地域の仲間と模索し、現実を受け入れながら未来を切り開こうとしている。

ウ 母や弟の期待を超えて、自分の理想と責任感に突き動かされるかのように地域活動を進め、周囲から認められる存在になろうとしている。

エ 外部に頼らず自ら考え行動する姿勢は持つが、その責任を一人で背負い込むあまり、無理をして疲れきっている。

(3) 屈託のない笑みだ<sup>A</sup> と溪哉が感じた理由として最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 実紀の語る未来像は溪哉には現実離れしているように響き、樂觀的すぎて重みがなく、笑みも軽やかに見えたから。

イ 実紀の秘めていた本当の思いをはじめて知り、自分と違いつすぐに故郷を思う気持ちに衝撃を受けたから。

ウ 実紀が自分の兄を尊敬し、人生の指針として語る姿に接し、自らの間に埋めがたい隔たりを覚えてしまい、その笑顔に寂しさを感じたから。

エ 溪哉自身は将来像を描けず迷い続けているのに対し、実紀は何も迷っていないかのように語り笑う姿が、うらやましさと悔しさを誘ったから。

(4) どれほど嗤<sup>わら</sup>つても嘲弄しても、実紀はびくともしないだろう

と溪哉がそのように感じた理由として最も適当なものを次のアからエまでの中から選び、記号で答えなさい。

ア 実紀は、周囲からの評価を気にしない性格であり、どんな意見にも表情を変えずに受け流す冷静さを持っていたから。

イ 実紀は、兄を理想化しているだけで、自分の言葉ではなく兄の考えをそのまま真似して語っていたため、他人の反応に無関心だったから。

ウ 実紀は、地元への愛着や将来への具体的な目標を持ち、それを行動で示そうとする強い覚悟があるため、多少のことでは揺るがない強さがあるから。

エ 溪哉は、実紀との関係が以前のようにには戻らないと察し、何を言っても通じない虚<sup>むな</sup>しさから、心を閉ざしてしまったから。

(5) 次のアから力は、この文章を読んだ六人の生徒が、意見を述べ合ったものである。本文の内容に基づいて正しい感想を述べているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア (Aさん) 実紀は地元を出る覚悟がまだ固まっておらず、将来の話もどこか抽象的だった。だからこそ溪哉は、実紀の話を聞いても内心では真剣に受け止めていなかったのだと思う。

イ (Bさん) 溪哉は、「飛び立てば何かに出会えるかもしれない」という淡い期待を抱いていたが、それは自ら行動してつかもうとする強い意志ではなく、他力本願で根拠のないものだった。その浮<sup>う</sup>ついた自分の考えに、実紀の言葉が対照的に響いたのだと思う。

ウ (Cさん) 溪哉は、実紀の夢を自分と同じようにぼんやりとしたものだと思って安心してしたが、兄への憧れを語る姿を見て、ようやくその本気度に気づき、自分もすぐに同じ道を目指そうと決意したのだと思う。

エ (Dさん) 実紀の語る夢や郷土愛は、淳也という兄の存在によって作られた借り物の価値観で、本心ではないように読めた。だから溪哉は、実紀の発言をうわべだけのものとして受け流したのだと思う。

オ (Eさん) 全体を通して、溪哉と実紀は将来を見据えた意志を「持っていない者」と「持っている者」という対比で描かれている。この対比が、溪哉の内面の揺れや未熟さを浮かび上がらせる構造になっていたと思う。

カ（Fさん） 溪哉はこれまで実紀の全てを知っているつもりでい

たが、郷土愛や兄への尊敬を語る姿を見て驚きを覚え  
た。そしてその驚きがきっかけとなり、二人の絆<sup>きずな</sup>は  
むしろ強まったのだと思う。

(6) この文章の表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを次のアからエまでの中から選び、記号で答えなさい。

ア 登場人物の心情はすべて地の文によって説明されており、会話は最小限にとどめられている。そのため、直接的なやり取りはほとんど描かれず、読者は登場人物の心情を推測することなく、常に説明的に受け取ることになる。

イ 自然描写や風景描写はほとんど使われておらず、場面は人物の会話中心に展開しており、背景の描写によってを心情暗示するような手法は見られない。情景描写がない分、登場人物の発言に集中しやすく、物語のテンポが速いのが特徴である。

ウ 比喻表現や擬音語を用いた生き生きとした描写は少なく、全体として淡々とした文体が続いている。それによって、登場人物の心情描写はあえて抑えられているため、読者は主人公の心の揺れをあまり強く感じる事ができない。

エ 地の文に溪哉の心の声や思考が深く入り込んでいるのが特徴である。実紀の言葉に心を揺さぶられ、自分の考えの浅さに気づく描写など、丁寧な心理描写によって溪哉の成長や心の揺れが読者に自然に伝わる構成となっている。

四 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

若き時は、血気うちにあまり、心、物にうごきて、情欲多し、身

を危めて砕けやすき事、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて

宝を費し、これを捨てて苔の袂にやつれ、勇める心盛りにして、  
僧衣のみすばらしい姿になり

物と争ひ、心に恥ぢうらやみ、好む所日々定まらず。色にふけり情  
恋愛に心奪われてふり

にめで、行ひをいさぎよくして百年の身を誤り、命を失へる例  
思い切りよく行動して我が身の一生を誤り

願はしくして、身の全く久しからん事をば思はず、好ける方に心ひ  
すき好む方向に心がひきつけられ

きて、ながき世語りともなる。身をあやまつことは、若き時のしわ  
永遠の語り草となったりもする

ざなり。

老いぬる人は、精神おとろへ、淡く疎かにして、感じ動く所な  
元気がなくなつて 感情的に動くことはない

し。心おのづから静かなれば、無益のわざをなさず、身を助けて愁  
身をかばって心配事がない

なく、人の煩ひなからん事を思ふ。老いて智の若き時にまされる  
わづら

事、若くして、かたちの老いたるにまされるが如し。

(『徒然草』より)

(1) 珠を走らしむるに似たり とあるが、その理由として最も適当

なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 血気盛んで動揺や欲望が多い若者が自らを危険にさらすことが、珠（宝物）を転がして自ら壊してしまうように危ういから。

イ 血の気が多く簡単に自らを危険にさらす若者の行動が、珠（宝物）を不用意に転がして砕いてしまうように愚かしいから。

ウ 血気盛んな若者がその心の動揺や欲望から身を危険にさらすことが、珠（宝物）が転がっていくときのように美しいから。

エ 血の気が多く動揺と欲望が多いがゆえに若者の自らを壊してしまう姿が、珠（宝物）が転がって壊れるようにはかないから。

(2) 身の全く久しからん事をば思はず の現代語訳として最も適当

なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の身が安全でないということを全く考えないで

イ 自分の身が完全なものであると思い込んで

ウ 自分の身が安全に長く続くことを全く願わないで

エ 自分の身が長い間完全なものだと願って

(3) 筆者の考える、年をとった人の特徴として最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 知恵を得過ぎてしまっているため心が動かない。

イ 心が静かであるため必要のないことはしない。

ウ 日によって好むものと好まないものが変化する。

エ 人に迷惑がかからないことだけを考えて生きている。

(4) 老いて智の若き時にまされる事、若くして、かたちの老いたる

にまされるが如しの解釈として最も適当なものを次のアからエまでのの中から選び、記号で答えなさい。

ア 年老いて知恵が増えるのは当然のことであり、若い頃の方が年老いた時より容姿が良いのも当然のことである。

イ 年老いた時の知恵が若い頃に勝るのは、若い頃の容姿が年老いた時より良いことと同じである。

ウ 年老いた時の知恵が若い頃より優れているのは、若い頃の容姿が年老いた時より良かったことに勝る。

エ 年老いた時につく知恵は若い頃には絶対つかないものであり、知恵は年を取らない限りはつかない。